

わぶ
今若もの
ざう

中里恒子

中央公論社

わが今昔ものがたり

定價一一〇〇圓

昭和五十四年九月一日 初版印刷

昭和五十四年九月十日 初版發行

著 者 中里恒子

發行者 高梨 茂

印刷所 精興社

發行所 中央公論社

東京都中央区京橋二八七

電話（五六一）五九二一

振替東京二二三四

©一九七九 檢印廢止

目次

川の鯉

草の敷寝

駱駝

鞍馬苔

バンタムのはとり

山川草木

亂菊

根曳き

あとがき

5

37

59

89

127

151

179

207

243

裝幀・題字 著者
函・十八世紀コブト

わが今昔ものがたり

川
の
鯉

川の石堤に腰かけて、じつと川を見てゐる男がゐる。

「鯉がゐる、あんなに大きくなつた、」

男は、自分が大きくしたやうに、自慢氣に言つた。わたしも立ちどまつて、川を眺めた。

「大きくなつたこと、」

「ここんとこに、七匹、曲り角のところに十四匹、橋の下に、七、八匹ゐる、」

「そんなにゐるんですか、」

「ゐる場所がきまつてゐるんだよ、」

合計三、四十尾近くは見かけるが、いつも、そんなにかたまつてゐるわけではない。

わたしも、再々、見てゐる。

この男は、勤め人ではない、病人だと、土地の者は言ふ。もういい年で、顔も皺だらけだが、なんとなくよれよれのズボンをわざとはいてゐるやうな、貧乏くさくない感じで、あたたかい時は、一日のうち、二、三度は、川のまはりをうろうろしてゐる。わたしも、長年、川を見てゐるが、たしかに近年、川の水は澄んで來た。十二年前に、この川すぢ一帶に集中豪雨が降つて、家屋に、床下、床上の浸水を見るほどの被害があつた。

川は、その前にも、つまり、戦時中にも溢れたことがある。土堤はだらだらと、川の岸邊に下りられるほどの高さで、この堤の道から斜面にかけて、商店の主や、頑健そのもののたけだけしい五十がらみの女たちが、遠くから、肥桶をかついで耕作に來て、野菜類小麦豆類をぎつしり作つた。

堤は、すっかり柔かく耕されて、川岸へらくに近づけるほど、平らにされた。

秋雨の續いた三日めの朝、川は増水し出した。満潮と重なる時は、浸水のおそれがあると、觸れが出た。

堤の上の畑作りたちは、雨の中を、豆をもちだり、大根を抜いたり、小松菜をとつたり、大童で、まだ出来きらない野菜を抜いていつた。

雨脚は激しくなり、川は溢れはじめた。川と、道との境界もわからなくなつた。人通りは絶えたが、自轉車で、水流のなかを走り去るひとも、家の側について走つた。畑は、みるみる水につかつて、堤のトマトの枝が、わづかに、枝先を見せてゐた。赤い實が、風雨のなかで揺れてゐる。

女の子が、川向うから、水に足を半分つけて、堤の上の、トマトのそばへ歩いてゆく。トマトのそばまで行きつかぬうちに、女の子は、川に落ちた。

水の上は、川と、道が一體となつてゐたのである。

ざあざあと降りやまぬ雨の音、流れの濁音だけが天地に響き、川筋に人あしは絶えた。

突然、しいんとした雨中に、ぎやあつと叫び聲がまじり、男女が濡れ鼠で、露地から水を蹴散して飛び出して、川岸で、金切聲をあげた。

「落ちたよオ、流されたよオ、」

川に向つてわめき立てた。聲は、よく通つた。

わたしは、家の中で物案じな氣持ではらはらしてゐたので、何か起つた、と蒼白になつて、川に面した高窓の前にいつた。橋の上を、ひたひたに濁流が越え、わづかに見える橋の欄干につかまつた大勢のひとが、ずぶ濡れになつて物干竿を持つたり、投網を持つたりして、右往左往してゐる。

「女の子が流された、」

「長作んとこの子だ、」

消防團も、消防車で來た。

濁流にのまれた女の子の姿は、橋桁にからまつてちらちらしてゐたが、激しい早さで川下へ流された。人びとは、海に近い河口に向つて走り出した。

おかみさんは、びしょ濡れのまま立ち盡してゐた。

「……水がどの位ふえたらうつて、話してゐたんです、すると、子供が、急に、長靴をはいて庭へ出たので、あぶないから、川の方へ行くんぢやないよ、庭は、少し高いからね、そのうち、見えなくなつた、このひとが、レインコートを出せなんて言つて

ゐるうちに、胸さわぎがして、もう、そのまんまで、出て見たんですよ、」

外へ出て見ると、往來も、川も見境ひなく大川になつてゐた。子供はゐない。――

誰かが、河口近くの曲り角で投網を打つた。女の子の、赤いものが、濁つた水流のなかに、浮き沈みしてみえたからである。

海へ出る寸前のところで、女の子は、網にかかつたが、すでに死んでゐた。

わたしは、長作といふ男の顔を知らない。女の子も、そのくらゐの年の子が、いつも川のそばで遊んでゐたのを見てはゐるが、その子が長作の子だといふことも知らない。

平常は、川の流れは浅く、川底の石を渡つて歩けるほどの水量しかないのだ。ただ、満潮時には、海水が逆流して川は増水するが、ぢきに、水は、海へ流れるので、川は、いつも穏かであつた。

しかし、女の子が川に落ちたのは、川の堤防が出来てゐなかつたこと、川のへりに、柵がなかつたことが、あとで、やつと問題になつた。

川ぶちの土堤の畑作りも、法度になつた。

それでも戦争が終るまで、堤の上の道の端のわづかな地面に、豆は生えてゐた。川は、雨が降り續くと、すぐ、大川のやうに滔滔と流れが急になる。雨がやめば、みるみる水は引いて、浅い川になるために、誰も、一時的の現象としてしか、水流の變化を氣にしなかつた。

女の子が溺死してはじめて、川岸に、柵が必要といふ話になつた。危険な場所も、いつでも必ず、ひとりふたり死人の出るやうな犠牲があつて、やうやく、役所といふところが動き出す。

「川浚ひをしたらどうなの、」

「さうだね、以前はやつたもんだが、」

「やればいいのに、川底を深く浚へば、溢水もすくなくなるでせう、」

「豫算がないんださうで、それに、川は、縣のもので、市では、手がつけられないんですよ、管轄が違ふんで、」

「川は、縣や、市のものだけではないわ、みんなのものだわ、危険にさらしておいて、責任は、誰もとらないのね、」

わたしは、傷んだ屋根を修繕に來た瓦屋の主と、そんな話をした。もう戦後である。一向に、川浚ひの様子はない。川の水は、まるで淺くなつて、塵芥や破れ蒲團や、こはれた自轉車や、油や、板にくくりつけた、何がはいつてゐるとも知れぬ大箱などが、川上から流れて來る。潮とともに流れ去つてしまふものもあるが、川岸の草場に打ちあげられて、幾日も、捨てられた芥は、置き去りにされてゐる。その上に、ビニールの白いものが、引つかかつて、見るからに、川は、よごれ、悪臭を放つてゐた。下水も、臺所の汚物も、洗濯の洗劑の泡も、ぶくぶくと、川の表面に溜つてゐる。わたしは、川の上に、物件を張り出すのは、規則としてかまはないといふことを、きいた。

手入に來た植木屋の親方が、

「……見るさまあなくなりましたな、昔は、鮎が上つて來たんですからな、」

晝休みの辨當をしまつて、一服してゐるところへ出たわたしに、さう言ふ。

「さうですよ、覺えてゐるわ、岸邊に小舟をおいて、海へも出られたし、潮のさして來るときは、舟で、このへんを夕涼みしたり、」

「左様でした、魷釣りも出来ましたな……こんなに川がよごれたのは、戦後、川上の方の山を崩して、むやみに團地を作りましたからな、水のひけどころはなし、雑水、汚水は、そのまま、川へ流すんですから、たまつたもんぢやあないです、」

「……川に、蓋をしたいくらゐよ、張り出していいなら、うちの前を蔽ひたいわ、」

「なんでも、川の上は、いいとかいふことで、以前、海口の川岸の別荘では、張り出しを作つて、そこに梯子をつけて川へ降りたり、張り出しの板の間に椅子など出して、涼んだりしましたですよ、」

京の貴船や、加茂川の岸に並んだ茶屋では、いづれも、川へ、床ゆかといふ板敷の座敷をしつらへ、簾で圍つて、床の上で、客たちの遊興が行はれる。

夏の蒸し暑い京の町では、川沿ひの床は、今でも残つて、季節の風物の一つになつてゐるが、床の遊びも、以前のやうな華やかなものではなく、大勢つめこんでの宴會が多く、しつとりと、家族連れで、馴染の藝人を連れてといふゆつたりしたものではなくなつた。

それでも、川風は、つめたく吹き通ふ。水にうつる灯のいろも、いつまでも心に残